

論文内容の要旨

Risk factors for abscess development in patients with endometrioma

who present with an acute abdomen

急性腹症を呈した卵巣チョコレート嚢胞患者における感染を起こすリスク因子

日本医科大学大学院医学研究科 女性生殖発達病態学分野

研究生 可世木華子

Gynecology and Minimally Invasive Therapy Vol.12 Jan.-Mar. 2023 掲載

<背景>

子宮内膜症とは、本来の子宮内腔とは異なる部位に子宮内膜様の間質や腺管構造が発育する疾患である。生殖可能年齢の女性の約 15%が罹患し、強い月経困難症状により QOL を著しく低下させる。不妊症や悪性腫瘍にも関連しており、近年の晩婚化や出産回数の減少に伴い子宮内膜症の罹患数は増加傾向である。

子宮内膜症の発症部位の中で最も多いのは卵巣である：子宮内膜症が卵巣に発症すると嚢胞状の病変を作り、卵巣チョコレート嚢胞と呼ばれる。ときに卵巣チョコレート嚢胞が破裂や感染を起こすと急性腹症を引き起こす事があり、単純破裂であれば保存的な経過観察が可能だが、細菌感染を併発すると急性腹症や骨盤腹膜炎、場合により敗血症を生じて重篤な状態に陥ることがある。

この論文の目的は急性腹症を起こした卵巣チョコレート嚢胞の症例を後方視的に検討し、単純破裂症例と感染併発症例に分けて比較することで、卵巣チョコレート嚢胞に感染を起こすリスク因子を見つけることである。

<方法>

対象は日本医科大学付属病院で 2011 年 4 月から 2021 年 8 月までの期間で急性腹症を起こして緊急手術となった 51 例で、診療録を後方視的に検討した。対象

の 51 例を囊胞内容液が白濁膿瘍化しているか内容液から細菌が検出されたものを Infected group (n=22)、内容液が褐色であり内容液から細菌が検出されなかったものを Control group (n=29)に分けた。患者背景として年齢、Body mass index、婦人科受診歴、子宮内膜症の薬物療法歴、子宮内膜症の手術歴、3 ヶ月以内の経腔操作の有無、6 ヶ月以内の経腔操作の有無、腹痛時の月経周期について確認した。また入院時や術前時の体温、血清中の反応性 C タンパク; 血清 CRP、白血球数、画像検査の所見と、腹腔鏡下手術か開腹手術の術式、各術式の手術時間、術中出血量、術後の入院期間について検討した。

<結果>

Infected group は Control group に比較して有意に年齢が高く ($p=0.03$)、子宮内膜症手術既往があり ($p=0.04$)、3 ヶ月以内に何らかの経腔操作を受けている患者が多かった ($p=0.01$)。この結果は 6 ヶ月以内の経腔操作では更に有意な結果 ($p=0.0017$)となった。Infected group は Control group に比較して有意に入院時の体温が高かった ($P=0.007$)。採血検査において Infected group では入院時の血清 CRP ($P<0.001$)、および白血球数 ($P=0.016$)が有意に高かった。術前の画像検査においては Infected group で有意に囊胞壁の肥厚 ($P<0.001$)があり、造影の増強効果も多く

認められた($P < 0.001$)。Infected group では開腹手術において有意に手術時間が長く($p = 0.0085$)、腹腔鏡手術においては術後入院日数が有意に長かった($p = 0.006$)。

<考察>

文献的には、子宮内膜症存在下で生殖医療における採卵後の腹腔内感染、複数回の人工授精後の卵巣膿瘍の報告が認められている。卵巣チョコレート嚢胞内に存在する古い血液が細菌叢の培地となり、嚢胞の存在自体が骨盤内感染の重篤化に関与すると考えられている。

本検討において、3ヶ月以内の経膣操作は、急性腹症を呈した卵巣チョコレート嚢胞症例の感染リスクファクターとして同定された。経膣操作の中で最も多かった操作は子宮内膜細胞診($n = 7$)であった。ここ10年来で子宮体癌は著明に増加していることが背景にあると考える。また、不妊症患者も増えていることから生殖医療を受ける患者数も増加しており、さらに子宮内膜症自体が潜在的な不妊の原因となるため生殖医療の必要性は子宮内膜症のない患者より相対的に高まる。

我々の研究においては、何らかの経膣操作を受けた後に腹痛が発症するまでの期間の中央値は10日であった。経膣操作後に卵巣チョコレート嚢胞に細菌感染

を認めた期間は、最短では4日、最長で60日であった。これは経膣操作の後に症状が出るまでの期間が一定ではない事を示している。実際に、体外受精の胚移植後に妊娠が成立し、20週間以上経って妊娠中に感染が成立し手術が必要になった報告もある。

この研究の limitation は、後方視的な観察研究であり、研究対象の症例数が多くないことが挙げられる。しかし本研究を前向き介入することは、急性腹症で受診した患者に保存的な治療を振り分けることとなり、倫理的に問題が生じる。また当施設では子宮内膜症の専門外来を設置し多くの子宮内膜症症例を診ているが急性腹症を呈して本研究の対象となる症例は1施設のみでは少なかった。今後、子宮内膜症合併症例の急性腹症に対してシステム化したフローを整備して、複数の施設で行うことで症例数を増やし更に正確な解析を行いたいと考えている。